

ふくよか

地域で支える医療と介護

2025 | 秋号 ■長崎県病院企業団本部
■令和7年10月発行



江袋の夕景(新上五島町)

CONTENTS

- P1 ——— 企業長より
- P2 ——— 病院企業団議会 議員研修
- P3 ——— 杵岐病院の企業団加入10年を振り返って
- P4 ——— 働きやすい職場環境づくり
- P5 ——— 看護職員の確保・育成
- P6 ——— 医療観察法関連職種研修会・夏季ワークショップ in 上五島・レッツ経営改善
- P7 ——— BREAK TIME

「ふくよか」の由来

医療人として患者さんに寄り添った会話が自然と出てくるような能力を付けて欲しいとの願いが込められています。

研修医の頃の話

長崎県病院企業団 企業長 八橋 弘

研修医の頃の話である。

ある日の朝、私は夜間救急外来を受診し入院となった30歳代の糖尿病性ケトアシドーシスの男性の主治医になった。当直医から引き継いだ時点では、患者と会話をすることができ、血圧も呼吸も保たれていた。しかし、血液ガスはPH 7.0以下の高度な代謝性アシドーシス(正常は7.4)で、電解質も血糖も見ることがないような異常値だった。インシュリンの持続注入と大量の輸液、電解質の補正を行うも、会話後1時間ほどで意識がなくなり、挿管して人工呼吸器管理をするも次第に血圧が低下した。そして24時間が経過した頃、その患者は亡くなってしまった。初期の輸液が足りなかったのか、病院を受診する時点で病態が完成していたのか、本当のところはわからない。しかし、私は一つの問いに苛まれていた。「どうしてこの患者は亡くなってしまったのか、どうすればこの患者の命を救えたの

く学ぶことが、いずれ患者の命を救う道に繋がるかもしれないと考えていたからである。様々な病気で命を落とす患者たちと接し、その最期を看取り、そして解剖を通して身体の内側からも死のメカニズムを可能な限り習得しようとした。

あれから数年が経ち、ある程度の人の死の経験を積んだ私は、ある結論に辿り着いた。人は、そう簡単には死なない。しかし、その死を的確に予測することは難しい。予期しない人が亡くなることは避けることができない。研修医だった頃の私は、人の死を乗り越える方法を探し求めていたが、実際には、人の死はもっと複雑で、予測不能な要素を多く含んでいることを学んだ。

か」と。その答えが見つからず、悩んでいた時があった。

そんな悶々とした日々の中で、私はある考えに至った。人が死に至るプロセスを観察すること、人はどのようにして死んでゆくのか、死に至るまでの体の変化を調べてそれを把握することで、その逆のプロセスを見出すことができるかもしれない。すなわち、人が死に至るプロセスがわかれば、生への道を明らかにできるのではないか。そうすれば、患者を救う方法を見つけられるかもしれないと考えた。ある日、私は上司に「できるだけ重症の患者、助かる見込みの低い患者の主治医に指名してください」とお願いした。その言葉を聞いた上司は、ニッコリと笑いながら「君が希望するなら、しばらく重症患者さんの主治医になってもらおう」と応えられた。重症患者の全てが亡くなるわけではない。しかし、多くの患者の死に至る

医師として駆け出した頃のこれらの経験は、医療の難しさと、生命の尊さ、そして儚さを深く教えてくれた。

それからの私は、死に至る数日前や数週間前に着目することから、死に至る病気の数年前に注目することにした。癌ができる原因や癌に至るメカニズムを明らかにする。癌の原因を取り除けば、癌にならない方法を見出せるかもしれない。それから数十年かけて、肝臓癌の原因の多くは肝炎ウ

までのプロセスを見ていると、収縮期血圧が80 mmHgを下回ると無尿となること、無尿になってから24時間で心停止が起こること、血圧も呼吸も意識も保たれていても血液ガスPH 7.0以下の場合には救命することができないこと、高度な代謝性アシドーシスは不可逆性の細胞死を意味することなどを学習した。そして、残念ながら患者が亡くなった場合には、遺族に可能な限り病理解剖をお願いした。それは、人の死、そして死に至る病気を深

イルス持続感染が原因であり、ウイルスを除去しないし制御すれば肝臓癌の発症を大きく抑制できることを明らかにした。そして学会や論文で報告した。

医師としての私の仕事の原点は、研修医の頃に多くの患者を救えなかったことにある。その時の悔しさと後悔は、数十年経過した今も消えることはない。それが今まで医師を続けてきた原動力だったように思う。

病院企業団議会 議員研修

8月29日、出島メッセ長崎(長崎市)において議員研修が開催されました。

今回の研修は、厚生労働省や千葉県庁などで勤務された千葉大学医学部附属病院 次世代医療構想センター長 吉村健佑^{けんすけ}先生から「政策から見る未来の医療－離島・へき地をどう支えるか－」というテーマでご講演をいただきました。

研修会の冒頭、片峰亨議長から、近年の地域医療を取り巻く環境は厳しく、今回は大変有意義な研修となる旨のご挨拶があり、約1時間半の研修では吉村先生から日本の医療と政策の現状、医師偏在対策と離島・へき地医療の生き残り方策、オンライン診療などを活用する未来の離島・へき地医療の在り方などについてご説明がありました。

講演後、参加者から公的医療機関のない地域の医療支援や、全国的な病院の経営難を受けての国の支援動向などについて質疑が交わされるなど活発な意見交換が行われました。



～ 吉岐病院の企業団加入10年を振り返って～

吉岐病院長 向原 茂明

2012年、長崎県庁で福祉保健部参事監として、行政に席を置いていました。

当時企業長だった米倉先生から相談があり、吉岐市民病院の立て直しを長崎県知事からご下命を受けたとのこと。医師不足が根幹の原因であり、約1年で、医師を確保することとなりました。長崎医療センターのご協力で1名、東京でのリクルート活動で1名、病院企業団のルートで1名、公募で1名と私を含めて5名で2013年4月に、総院長として吉岐市民病院へ赴任しました。当時常勤医は大学派遣を入れて7名で診療にあたっておりましたが、当時の診療水準は、決して高いとは言えず、救急医療も十分に対応できていませんでした。ただ、病院職員の方々は、病院の危機的状況を十分理解しており、非常に協力的に業務が行われました。

当時のミッションの1つに、長崎県病院企業団への加入がありました。しかし、その条件は厳しく、病院収支を黒字化すること、医師派遣を企業団へ頼らないことの2つで

10篇を超えています。2019年には、福岡大学と「保健・医療に関する連携協定」を吉岐市と吉岐医師会の二者で締結し活動を推進しました。また、2023年からは、福岡大学筑紫病院から常勤医の派遣も始まり、循環器、腎疾患、糖尿病といった生活習慣病への積極的介入が重層化されてきました。この間、専門外来の充実にも力を注ぎ、今では、「循環器」「呼吸器」「糖尿病・代謝」「血液」「膠原病・リウマチ」「フットケア」「認知症」「骨粗しょう症」「睡眠時無呼吸」「緩和ケア」などの専門外来も充実しました。

もう一つ忘れてはならないのが、看護部の充実でしょう。

当院に赴任する前に、看護部の改革が重要であるとの認識を当時の米倉企業長といました。そこで当時の国立再春荘病院の看護部長だった米城和美さんへ白羽の矢をたてました。私の目標は、研修・教育の充実にありました。とにかく、今までが赤字体質の病院でしたから、研修など受けづらい環境にありましたが、人材発掘と、研修を推進していきました。結果、感染や、皮膚・排泄ケア、がん化学療法の認定看護師も誕生し、医療安全部門も独立し、機能分化と充実が図られています。さらには、2016年から、

ありました。ところが、2014年には、久しぶりの黒字化を果たし、企業団加入への道が近づきました。県や、企業団本部のご尽力のおかげで2015年に企業団加入が果たせました。

しかし、医師派遣を企業団に頼らないというもう一つの約束を果たすために、福岡県を中心に九州大学、福岡大学、久留米大学、長崎大学をリクルート活動する日々でした。いずれも、医局員の減少等の影響で派遣には至りませんが、セルスの鉄則、とにかく粘る、アピールすることを繰り返して訪問を続けました。2016年から福岡大学腎臓膠原病内科教授の中島衡先生が、医師派遣を決定していただきました。

診療看護師の庄山由美さんが赴任し、看護部を中心として、研究や専門性向上へ一役買っていたいています。現在3名の診療看護師が在籍し、各々も専門性を生かし、当院の診療・看護機能の向上に役割を担っています。

病院企業団加入10年を振り返ってみて、何よりも人材育成が重要であると確信しました。病院機能は充実し、外来患者や入院患者、救急患者の受け入れなど増加の一途をたどっています。（ここ数年横ばいではあります）何よりも、吉岐市民から地域の基幹病院として信頼されるようになってきたことを実感しています。今後、人口減少を迎え、経営的には困難な局面を迎えると思いますが、心臓カテーテル室新設を伴う循環器領域の充実や健診の充実を図り、生活習慣病の予防やがんの早期発見といった機能充実をさらに進めていきたいと思っています。

働きやすい職場環境づくり

～仕事と介護の両立を目指して～

育児・介護休業法*が改正され、令和7年4月1日から介護を行う必要が生じた職員から申し出があった場合、所属長は面談の機会を設け、両立支援制度の情報提供や活用の意向を確認することが義務化されました。

病院企業団でも、仕事と介護の両立やワーク・ライフ・バランスを大切にしながら働き続けられるよう、介護休暇

や介護時間など柔軟な働き方ができる制度がありますので、介護に直面された職員の皆さんは、一人で悩まずに上司や所属長へお気軽に相談してください。また、両立支援制度については、わかりやすくまとめたリーフレットもありますのでご活用ください。

全ての職場において、介護中の職員が休暇を気兼ねなく取得できる雰囲気づくりはもとより、職員がお互いのことを理解しあい、応援できる職場にしていきたいと思います。



※育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律および次世代育成支援対策推進法の一部を改正する法律



平成27年4月の病院企業団加入時の除幕式

第20回 医療観察法関連職種研修会

7月4日・5日の2日間にわたり、長崎市内で第20回医療観察法関連職種研修会(会長 大塚俊弘精神医療センター院長)を開催し、全国から医療観察法制度に関わる多機関・多職種の皆様にご参加いただきました。

20回目の節目となる今回は、大石賢吾長崎県知事や古庄祐輔厚生労働省室長補佐等来賓の皆様にご臨席いただいて、開会式を行い、テーマを「医療観察法と20年」として、医療観察法が精神科医療にもたらしたものや今後の課題等について、4会場に分かれて活発に発表・意見交換が行われました。

※精神科医療の県連携拠点施設である精神医療センターでは、医療観察法制度に基づき、心神喪失又は心神耗弱の状態、殺人、放火等の重大な他害行為を行った人の社会復帰を促進することを目的とし、十分な人員配置による密度の高いチーム医療等専門的な医療等を提供しています。



夏季ワークショップ in 上五島

長崎県では、県医学修学資金貸与制度や自治医科大学派遣制度を利用している医学修学生に対して、医学部生の段階から地域医療への理解を深めてもらうため、毎年夏と冬に、ワークショップを開催しています。

今回は「令和7年度夏季ワークショップin上五島」として、8月22～23日に開催し、1日目は介護施設でのフィールドワークや行政・病院関係者からの説明、先輩医師との座談会、参加者全員による交流会を、2日目は島根大学医学部附属病院総合診療医センター長の白石吉彦先生の講演や、「未来の医療をデザインする ～上五島から考える地域医療のかたち～」をテーマとしたワークショップ、病院見学を行いました。



この夏季ワークショップは昭和53年から行っており、今年で47回目。今回は1～3年生62名が参加し、先輩医師から医療現場の話を聞いたり、ワークショップでの活発な議論などを通じて、地域医療に関する理解を深めるとともに、先輩医師や医学修学生相互の関係づくりができ、有意義な機会となりました。

レッツ経営改善

前号の令和6年度病院企業団の決算速報では、経常損益は昨年度から約14億円悪化し27億円の赤字でした。これは入院・外来収益の合計は前年度並みでしたが、給与費や経費が大きく伸びたためです。

全国的に病院経営が厳しくなっている中、収益については目の前にあることを少しずつ積み上げていく、コストも少しでも減らしていくことが大きな経営改善につながっていきます。ちなみに、令和6年度の患者一人当たりの入院診療単価は42,224円(前年度比+1,157円)となり、経営改善の一環として、診療報酬上の上位施設基準の取得、指導料・管理料の算定件数の増などに取組んだ成果であり、このことは安全で効果的かつ質の高いケアを患者様に提供したことになります。

今年度も昨年度と同様、上五島病院と壱岐病院において長崎大学医学部を卒業された先生による経営コンサルティングを予定しています。引き続き、病院企業団職員一丸となつて、良質な医療の安定・継続的な提供のため、より一層の経営改善の取組を進めていきたいと思います。



看護職員の確保・育成



県看護協会主催の「2025看護への道フェア」へ参加

8月5日、県看護協会主催の同フェアが開催され、病院企業団からは五島中央病院の大久保看護師、対馬病院の末松看護師長、壱岐病院の香椎看護師の3名と本部職員が参加しました。

ブースに集まった約40名の学生や保護者に対して、それぞれの看護師から離島医療における看護の現状、具体的な働き方や、やりがいなど「しまナースの魅力」について、本部職員からは病院企業団の修学資金制度や教育制度、企業団看護職員の魅力などについて情報を発信しました。



アイランドナースリフレッシュ研修・交流会

8月8日、アイランドナース※の皆さんの研修・交流会を実施しました。

今年度は対馬病院の溝上看護師(九州医療センターから派遣)、五島中央病院の松尾看護師、大川看護師(ともに長崎医療センターから派遣)の3名が参加し、それぞれが離島病院での学びや気づき、今後に活かしていきたいことなどを意見交換し共有しました。

また、八橋弘企業長から「アイランドナースに期待すること」、庄山由美主幹から「看護師のキャリア形成」をテーマに講義があり、参加者は改めて自分のキャリア形成について考える機会となりました。

※アイランドナースとは
都市部の大規模病院から企業団の離島病院へ看護師を1年以内派遣する制度。



令和7年度の幹部看護職員の短期研修

令和6年度から幹部看護職員の他企業団病院での短期研修(副看護部長:2週間、看護師長:1週間)を始めています。この研修では、本土と離島の複数病院で構成される企業団病院において、他病院での実践を通じて人事や業務管理などを学びながら、管理者としての視野拡大とキャリア形成を図ることを目的として実施しています。

昨年度は7名が研修を行い、人材確保や育成・組織マネジメント、ICT活用の実例、チームナーシングのあり方など、多岐にわたる実践的な学びが得られたとの声があり、特に普段関わることのない他病院それぞれの特色や課題に触れることで、新たな視点を獲得、自院の改善や医療の質向上に活かしたいという前向きな意見が研修後のレポートで報告されました。

今年度は4名の副看護部長・看護師長が他病院での研修を予定しており、参加者が新たな知識とスキルを習得し、幹部看護職員としての組織マネジメント等の向上につなげることを目指します。

長崎の古墳を知る

県内のお茶の約6割の生産を占める東彼杵町。私はその
ぎ茶を求めて、道の駅「彼杵の荘」によく行きます。直売所では、お茶はもちろん、新鮮な地元の食材やお菓子などたくさん販売されています。散歩を兼ねて隣接する「ひさご塚古墳」にも行きますが、全長58mの県下でも大きいクラスの前方後円墳は、築造は5世紀前半、大村湾岸で勢力のあった豪族の墓と考えられています。

近年、少子高齢化などの影響により永代供養などが行われ、これまで当たり前だった自分の子供がお墓を継ぐ時代ではなくなっています。九州でもお墓の後継難で「前方後円墳」を模した永久墓が売れていると聞くと複雑な思いになります。これからお墓はどうなっていくのかと終活を考え始めた今日この頃です。一方で古墳がつくれる緑豊かな場所、見晴らしの良い場所、太陽や風が気持ちの良い場所などに行くと、現地
の空気を吸いながら古代の情景を想像するだけで、とても心が癒されます。

今回は県内の古墳のいくつかをご紹介しますが、一般論として、古墳とは3世紀中頃から7世紀初め頃に築かれた墳丘（盛土）を持ち、埋葬施設や副葬品など画一性を備えたお墓のことです。形状として「方墳、円墳、前方後方墳、前方後円墳」がありますが、後述の前方後円墳にいくほど順番に埋葬者はヤマト政権に近く、規模が大きいほど政治的地位が高いとされています。最近、中国の史書に記述がない日本の「空白の4世紀」の謎解明の鍵を握る古墳として、奈良市の富雄丸山古墳が注目されています。この古墳からは国内最大級の剣



ひさご塚古墳（東彼杵町）

や国宝級の鏡が出土し、4世紀のヤマト政権の勢力拡大を示す有力な手がかりになると期待されています。

県内の古墳をみると



BREAK TIME



総数は概ね5百基余りで、有名な古墳が多い壱岐にその半数以上があります。私が興味深く思っているのは古墳の分布です。県全体に広がりがあるものの、時津町の前島古墳群以北の西彼杵半島や長崎半島、小値賀町の神ノ崎遺跡以南の五島列島には存在しません。不思議に思われますが、当時の畿内勢力の浸透の結果と読み取れます。

長崎市の曲崎古墳群は、トラフグの養殖が有名な長崎市牧島町にあります。この古墳群は5世紀末から7世紀頃にかけてつくり、100基を超える墳石塚やガラス製玉類などが確認されています。通常、古墳は遺体を入れる石室を築きその上に土を盛りあげていますが、この古墳はひたすら丸い石ころを積みあげているところが特徴です。

対馬市では、高台にある出居塚古墳は全長約40mの九州最大の前方後方墳で、築造は4世紀後半と古い。矢立山古墳群はT字形石室といわれる珍しい構造をもつ高塚古墳で、対馬の西海岸集落に注ぐ佐須川の右岸にあり、7世紀前半から終末にかけて築造です。

壱岐市については、県内最大の円墳である兵瀬古墳、県内最長の横穴式石室のある鬼の窟屋古墳、県内最大の前方後円墳である双六古墳、貴重な金銅製馬具類が出土した笹塚古墳など様々な古墳があります。皆さんも掛木古墳からスタートして鬼の窟屋古墳まで歩いて回れますので、一度訪ねて古の情景に思いを馳せてみてはどうでしょうか。

さて、最後に心に残った一言、『チックタック～約束の時計台～』という絵本を書かれた芸人で絵本作家の西野亮廣氏。この作品は込めた思いとして、11時台だけ針が重ならない、人生でいうと報われない11時台の人生が必ずある。だから鐘の鳴る12時まであとちょっとだけ頑張ってみましょう。

（文：副企業長 馬場秀喜）

編集後記

今回は壱岐病院の企業団加入10年を記念し、向原院長にご寄稿いただきました。10年前、ふくよか第3号の表紙には壱岐病院開院セレモニーの様子が掲載されています。「ふくよか」も10年を超えたことに気づき、感慨深い気持ちになりました。秋の気配を感じる季節を迎えました。何かと実りの多い秋になりますように。[M.K]

表紙写真提供：（一社）長崎県観光連盟

令和7年10月発行
編集・発行／長崎県病院企業団本部
〒850-0035 長崎市元船町17-1 長崎県大波止ビル7階
TEL.095-825-2255 FAX.095-828-4759
[E-mail] honbu@nagasaki-hosp-agency.or.jp
[U R L] <https://www.nagasaki-hosp-agency.or.jp>

◎上記メールアドレスに記事についてのご意見・ご感想を どんどんお寄せください！

地域で支える医療と介護



長崎県病院企業団

検索

ながさき
ピース文化祭
2025